
僕の瞳に映らない

さくも ひかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の瞳に映らない

【コード】

N3577P

【作者名】

さくも ひかる

【あらすじ】

目の見えなくなった僕と、そんな僕を見た彼女。

病院のベットで目を覚ます。ぱちり、と自分の目を開くが、認識できるのはただただ暗闇。何も見えない。己の現状を思い出し、事実を知ってから消えることの無い絶望的な気持ちが生き上がってきた。

僕は、視力を失ったのだ。

- - - - -

緑内障、という病気がある。

おおざっぱに説明すると、眼球に圧力がかかるなどして、視神経が歪んでしまい視野が欠損していき、末期になると失明にまで至るという恐ろしい病だ。

日本での失明の原因として最大のものであり、僕の失明もまたこれが原因であった。

数ヶ月前から、目や頭が痛むようになった。ここ最近視界に違和感も感じていた。緑内障という病気は元から知っていたが「自分に限っては大丈夫だろう」という、今考えると張り倒したくなるような甘い考えで病院には行かなかった。死角が広がり、マズいかもしれないと思った時には手遅れで、その後の治療も虚しく数日前から僕の視界は完全に暗黒に閉ざされてしまった。

緑内障によって失われた視力は回復することがない。

つまり、僕はもう二度と何かを「見る」事は叶わなくなってしまうのだ。

目が見えなくなる、というのは本当に恐ろしいことだ。自分がどこにいるかすら分からず、一歩踏み出すたびにそこに地面があるのが不安になる。一人では何も出来ず、トイレすら行けない。

本を読むこともロクに出来ない。漫画なんてもつてのほか。インターネットも、ゲームも、当然外で友人たちとサッカーやバスケットボールを楽しむことも出来やしない。およそ娯楽と呼べるものはほとんど出来なくなってしまった。

医者は「訓練をすれば日常生活くらいは送れるようになるだろう」と言っていたが、今の僕にはとてもそうは思えなかった。昔見た、目が見えない人たちが杖を持ちつつも外を歩いていた光景を思い出すと、彼らはよく外を歩くことができるな、と思う。

ベッドから起き上がり、軽く延びをしてため息をひとつ。ベッドに備え付けの机の上に置いてある音声時計を手探りで取り、ボタンを押す。「ただいまの時刻は 四時十五分 です」と、録音された音声 flowed。僕はさらにため息をつく。ロクに出来ることなく、度重なる身体検査などで精神は参っているが、体は疲れていないので早くに目が覚めてしまうようになった。かといって、早起きすればやることがあるわけでもない。

朝も、夜も、ただひたすらに憂鬱な毎日だった。

長い間退屈極まりない時間を過ごす。やがて朝食の時間になり、看護師に食事をさせてもらい――情けないが、一人では食べられない――その後、検査が始まる。

看護師に連れられ検査室へ向かう。そこで目を覗きこまれたり、何か機械で写真を撮られたり目薬のようなものを差されたりする。検査が終わると、昼食をとってから「目が見えない人」として日常

を送るための訓練。いつまでも病院にいるわけではない。一人でも最低限の生活は送れるように、という訓練だ。

その訓練も終わり、夕方になるとまた退屈な時間が始まる。友人たちが尋ねてきてくれる時もあるが、彼らも毎日来るほど暇じゃない。

退院した後も今とそう変わらない生活が待っているだろう。それはとても絶望的なことで、生きていくことが辛かったが、かといって自殺するような度胸もなかった。

ただただ、からっぽな毎日だった。

- - - - -

昼寝をしていたら、夢を見た。

夢の中の僕は目が見えていた。青い空、白い雲の下、周囲は見渡す限りの果てしない草原。テレビやネットでしか見たことの無いような、壮大な光景。僕は走り出した。どこへともなく、ただ走った。走りつかれたら地面に寝転がって、きれいな青空をじっと見ていた。夢とはとても思えないくらいリアルで、美しかった。

その美しい世界の中で、僕は一人の少女の後姿を見つけた。彼女は衣服を身に着けておらず、その肌は真っ白だった。まるで彼女の周囲だけ色というものが無くなってしまったかのように。

彼女が、こちらを振り向いた。当然のようにその顔も真っ白だったが、瞳だけが優しい茶色を帯びている。彼女は僕に気がつくこと、少し驚いた表情を浮かべてこう言った。

「ねえ、ここはどこ？」

夢から覚めた時、僕は心の底から落胆した。なんて残酷な夢なんだろう、あんな風景など二度とは見られないのに……転んだり、何

かにぶつかることを恐れずに走り回ることなど、出来はしないのに。思わず、涙が零れていた。もっと早く病院に行っていればこんなことにはならなかっただろうか？いや、それよりどうして俺がこんな目に。……頭がくらくらする。

そういえば、夢の中の少女はなんだったんだろう。あんな特徴のある女の子は見たことがない。

そして、一糸纏わぬあの姿。

「欲求不満、かな？」

こんなに絶望的な気分でも性欲はあるのか、と自嘲する。目が見えないことと、「そういうこと」が出来ないことの欲求が重なってあんな夢を見たのだろう。そう結論づけたところで。

「何が不満なの？」

声が、聞こえた。

「わっ、えっ、誰?!」

驚いて声を上げる。……夢の中で聞いた、あの声で話しかけられたのだ。

周囲を見回すが、当然見えるわけがない。

「あ、ごめんね。驚かせちゃった？」

驚いたなんてものじゃない。まだ夢を見ているのだろうか？彼女の姿は見えないが、いやおうなしに夢の中で見た裸体のイメージが浮かんでしまう。僕が何も言えずに口をぱくぱくさせていると、彼女がまた口を開いた。

「わたし、今日からこの病室に入院することになったの。一緒に病室だから、これからよろしくね。」

「あ、ああ。よろしく。って、君は女の子だよね？」

慌てて言葉を返したが、疑問が浮かんだ。

「むっ、私が男の子に見えるの？」

彼女は不満げな声を上げる。もし彼女が姿も夢の中と同じだとしたら、そりゃ男には見えないな。と思った。もちろんそんなことは口

には出せないが。

「ああ、ごめん・・・僕は、目が見えないんだ」

「えっ・・・？あつ、ごめんなさい・・・。そんなつもりじゃなかったの」

「いいよ、気にしないで」

感情の豊かな子だな、と思った。表情が見えなくても、声色や雰囲気などから感情が伝わってくる。きつと素直でいい子なんだろう。同じ病室に居ても彼女のような子なら悪くないな、と考えたところで先ほど思いついた疑問を再度口に出す。

「それより、男女が同じ病室・・・それも、二人用の個室を使うなんて、ちよつと変じゃないか？」

この病院は大きな病院ではないが、入院患者で溢れかえっているわけではない。わざわざ異性を同室に詰め込む必要なんてないはずだ。

「あ、それはここがナースステーションに近いからだよ。緊急時、すぐに看護師さんに来てもらえるでしょ？」

「確かに・・・そんなに重い病気なの？」

言うてから後悔する。人間、探られたくない事情があるというものだ。案の定、彼女は暗い声音で言った。

「うん、ちよつと、ね。あんまり長くないかもしれない」

「・・・ごめん」

「ううん、いいよ。これでさっきのおあいこだしね。とにかく、そういうことだし、私も気にしないということここで入室することになったの。」

「なるほど。まあ・・・僕も気にしないよ。見えないから、覗きとかは心配しないでいいよ？」

おどけた調子で言うと、彼女は楽しそうにくすくすと笑った。

「そうだ、まだ名前を覚えてなかったわ。私の名前は鈴木里香。里香って呼んでね」

「わかった、里香だね。僕の名前は涼。長谷川涼だ。僕も涼でいいよ」

まだいくつか腑に落ちないこともあったけれど、彼女と話しているうちにそんなことはどうでもよくなっていた。

彼女と話しているのは楽しい。目が見えなくなつてから、僕の感情は哀しみだけを残して忘れ去られてしまつていたような気がしていた。今日、楽しいという感情を久々に思い出していた。僕のどうしようもなかった毎日に、光が射したみたいだ。

「じゃあ、涼が目が見えなくなつたのはつい最近なんだ」

「うん、正直、まだ瞼の裏に風景が写り込んでる気がするよ」

次の日には、僕と里香はすっかり打ち解けていた。二人部屋の個室といつてもベッドとベッドの間には距離があるし、仕切りのカーテンもあるのだが、暇さえあれば里香は僕のベッドまで来ておしゃべりをしていた。

「里香の病気は、どんな病気なの？」

「私はね、肺の病気なの。今は大分調子がいいから、激しい運動をしたりしなければ大丈夫だけどね」

そう言つて、彼女は深呼吸をした。「ああ、空気がおいしい。なんてね」そして里香はくすくすと笑つた。つられて僕も笑い出した。

彼女は笑う時、本当にくすくす、と言っているように笑う。その笑いが僕は好きだった。

「里香は別の病院から転院してきたんだよね。前の病院はどうだったの？」

今は調子がいいから、ということとはここに来る前にもどこの病院に入院していたはずだ。そう思つて聞いたのだが、彼女は困つたような顔をして

「うーん……何にもなかった、かな？」

と、なんとも曖昧な答えを返しただけ。触れられたくない話題かもしれないので、僕は話題を変えることにした。

「そういえば、里香はどんな髪型なの？」

「髪型？・・・えっと、腰辺りまで伸ばして、結んだりしてないの」

「ふうん。いいね、きつと似合ってるよ」

もしかして、髪の色が真っ白だったりする？と聞きかけて、やめた。

やっぱり、夢の中と同じだ。声も、姿も同じだとすると運命めいたものを感じないでもない。

「あら、もうこんな時間」

「ん、何時？」

「12時。病人はもう寝ないとね」

いつの間にか、随分と話し込んでいたらしい。

彼女と出会う前はあんなにも長かった時間が、飛び去るように過ぎている気がする。

「そつか。それじゃあおやすみ。また明日」

「ええ、また明日」

彼女の気配が遠さがり、僕は布団を被った。しかし、不思議となかなか寝付けなかった。

・・・夢の中で見た女の子は、とても綺麗で、可愛かった。もし、先程まで話していた彼女が本当にあの子と同じ姿で今僕と同じ屋根の下（といっても、この病院に入院している人は皆「同じ屋根の下」だが。）こうして過ごしているのかもしれないと思うと、正直少しくドキドキする。

けれど、そもそもそんなことがあるのだろうか？目の見えなくなった僕が入院してくる彼女の姿を夢で「見る」なんて、あまりに出来過ぎた冗談だ。しかし、少なくとも彼女の声と（自己申告だが）髪型に関しては夢と一致している。目が見えさえすれば……と、考えたところでふと気がつくことがあった。

彼女と出会ってから、目が見えないことを嘆き悲しみ、死んだほ

うがマシかもしれないと絶望することがほとんど無くなった。しかし彼女と出会ってからは、それどころか笑ったり、心が弾んで楽しい気分であることが随分多くなった。相変わらず目が見えないことで不便なことは多いし将来に問題も不安も山積みだけど、今はどうにかなるさ、という気持ちでいられる。彼女のおかげで、どうしようもない絶望から抜け出すことが出来たみたいだ。

だけど、彼女は言っていた。「長くはないかもしれない」と。もし彼女が居なくなってしまうたら僕はその先、希望を持って生きていけるだろうか？

「いや」

ベッドの中で小さく声を吐く。ほんの少し前に出会った少女に、いったいどんな重たい感情を持っているんだ、僕は。こんな風に想われていたら、きつと迷惑だろう。

そう、ほんの少し前に出会った少女に・・・

どうしてこんなにも、重たい感情を持ってしまっただろう。

どうしてこんなにも、想いを寄せてしまうのだろうか。

僕は、どうやら彼女のことを好きになってしまったらしい。

僕が自分の気持ちに気がついてからも、里香との時間は何も変わらなかった。

自分でも驚くほどあっさり「彼女のが好き」という感情を自分で受け入れ、そして今までと変わらずに接することができた。

「私ね、涼の笑いが好きよ」

「どうしたのさ、突然」

彼女のほうも、最初に出会ったときから変わらなかった。ちょこつと不思議なところもあるけれど、かわいらしく、優しい人。

「なんとなく。なんだか、ほんわかした笑い方なの」

「そう・・・僕も、里香の笑い方、好きだよ」

「そう？ありがとう。嬉しいわ」

「僕は里香に会うまでずっと、もうこうやって笑うことはないかもしれないって思ってた。目が見えなくなっ、なにもかもイヤになっっていたから。でも、こうやってまた笑えるようになったのは里香のおかげだよ」

「ふふふ、そう言ってくれると嬉しいな」

彼女はまた、くすくすと笑う。

ずっとこのままでいられたらいいのに、と僕は思う。

「ずっと、このままでいられたらいいのに」

「えっ？」

僕の想いを見透かしたように、彼女が小さくつぶやいた。

「ううん、なんでもない・・・なんでもないわ」

・・・前に彼女は「あまり長くはない」と言っていた。これまでそんなそぶりを見せたことは殆ど無かったが、やはり容態は悪化しているのだろうか？

.....

それからというものの、彼女は突然ふっ、と暗い雰囲気をもとわせるようになった。きつと顔が見えたならば表情も暗かっただろう。

体調が悪い、という感じではないものの、今にも泣き出してしまいそうな時すらあった。僕は幾度も彼女の憂鬱の原因を聞きだそうとしたのだが、彼女はいつも「なんでもない」と言うだけであった。

「ねえ、涼」

そしてその日は、特別に悲しそうな声音をしていた。

「・・・里香、どうしたの？」

「涼、私・・・もう、さよならかもしれない」

「なっ・・・ど、どうして？病気が悪化したのか？」

首を振る気配とともに、か細く「違うの」という声が聞こえた。

「じゃあ、どうして？」

「涼・・・私、あなたのこと好きよ」

僕の問いかけを無視して、彼女は突拍子も無いことを言う。

「なっ・・・何を、突然・・・！」

「ごめんなさい、突然こんなこと言って。ごめんなさい、さようなら。」

「待つて、里香・・・待つてくれ！」

僕は突然の事に混乱し、驚きながらも彼女のほうに手を伸ばした。

・・・そして、彼女の気配が「消えた」。

伸ばしたまま、行き場をなくした手が、だらりと垂れ下がった。

.....

その後、検査に来た看護婦に彼女のことを問い詰めたところ、驚くような答えが返ってきた。

そんな人はいなかった、と言うのである。それどころか、僕の病室は「一人用だ」ということだ。言われてみれば、彼女と出会う前にそう説明されていたような気がする。

彼女がいたはずのベッドも無かった。ついさっきまで、確かにそこにベッドがあつたはずなのに。他にも、今考えると明らかにおかしいことがいくつもあつたのになぜ僕はたいした疑問も持たなかつたのだろうか？

全部、僕の妄想だったのだろうか・・・退屈な毎日に頭がおかしくなっていたのだろうか？そう思っていたところに、質問を向けた看護婦がさらに驚くようなことを言った。

それは、僕の言った彼女の特徴と一致する人物が、僕の前にこの病室にいた、そしてその彼女は・・・この病室で息を引き取っていた、

ということである。

「幽霊」という言葉が頭に浮かぶと同時に一瞬寒気がした。が、すぐに思い直す。彼女が僕に危害を加えたことがあったか？それどころか、絶望していた僕に希望を与えてくれた。たとえ幽霊だったとして、それに恐れるのは彼女に失礼だし、かわいそうじゃないかと。

そして、僕は今までよりいつそうリハビリに懸命に取り組んだ。

目を見張るような速度で訓練を進め、医者から「これならば、人通りの激しい場所などでなければ問題なく歩けるだろう」というお墨付きをもらうと僕はすぐにある場所に向かった。

僕の前にあの病室にいたという「彼女」の墓に向かい、手を合わせる。

なぜ彼女が僕の前に姿を現したのか、なぜ彼女が幽霊としてあそこに居たのか。そもそも僕が話していた「里香」とこの墓の下に眠る人物が同一人物かは分からなかった。

それでも、僕はここに来たかった。そして言いたかったことがあった。

「里香のおかげで、僕はこれからも生きていけるかもしれない」

「僕も、里香のことが好きだったよ」

小さく、ぼつりとつぶやいた。

一瞬、里香の声と、彼女の髪の毛の甘い香りを感じた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3577p/>

僕の瞳に映らない

2010年12月7日09時43分発行